

〔VII〕 附属学校のあり方

結 城 陸 郎

(昭和43年9月～同46年3月学校長在任)

創立30周年を迎えられたことを祝福するとともに、これを機に新たな意気に燃えていられる雰囲気を感じ、衷心から敬意を表する。30年という年数は、これを人間の成長過程に例えれば、いわゆる「而立」の時期に当り、肉体的にはもちろん、精神的にも一定の堅固さと飛躍のエネルギーの集積を意味する重要な転機といえる。迷い・失敗・成功等々、諸種の貴重な体験を経た上で、確固たる歩みへの構えのできた時期である。名古屋大学教育学部附属学校は、いまその段階に到達したわけで、関心した年縞への御苦勞を稿とともに、向後の発展と教育界への貢献を切に期待する。愚生自からの在任中のことどもを回顧すれば、忸怩たるものを禁じ得ず、汗顔の至りではあるが、礼儀にかなうべしとの意識において、求めに応じて筆を執り、私見の一端を述べることにする。

もう半世紀余りも以前のことで、或いは誤認もあろうかと自戒をしながら、先づ嘗ての附属学校のことを回顧してみよう。それは昭和10年代、田舎の一教師であったころのことである。そのころの師範学校附属校の、少なくとも所在府県教育界における地位は実に絶大なものである。附属学校教員が来訪されることになると、異常な緊張感のなかでこれを迎えるのであった。年1回ないし2回の附属校における研究発表会は、県下教育界最大のハイライトであった。県内の隅々から馳せ参じた青年教師たちは、眼を輝やかせながら模範授業における教師や児童の一举手一投足にジーツと見入り、共同討議の場における発言に耳を傾け、メモをし、意気揚々と任地に帰って行くのであった。その時の参会者のすべての思いは、濡り気をふくんだスポンジが水を吸収する時のようなもので、なけなしの財布をはたいたことの苦痛を忘れて、ただ喜びと感激に浸るのみであった。これを迎える残留者は、オーバーな表現をすれば、海外留学帰朝者に対するような気持で当人を取り囲んだのである。それは、マスメディアの未発達、教育研究書等印刷物入手困難な当時の文化情勢が一要因であったことは否定できない。が同時に、当時の附属学校及び同構成員が、名実ともに県下教育界のリーダーシップをとり、畏敬的であったことに由来する。それは県下教育界の人事構成を一瞥することによって如実に知ることができるのである。このことは東京・広島の両高師（文理大）やお茶の水・奈良両女

高師附属についても同様であった。当時の教育研究書の執筆者名を拾い挙げれば一目瞭然のことであるが、より以上に特記すべきことは、大正自由主義教育の開花が及川平治や千葉命吉ないしは木下竹次らによってもたらされ、さらに遡れば、明治初年の開発主義教育思想や庶物指教の教育方法が若林虎三郎らによって附属学校内で生まれて全国に普及していたことどもである。まさにわが国近代教育史の展望のなかで浮び上るものは附属学校である。要するに、昭和前半期に至るまでのわが国教育発達の源泉は、その設立意図のままに附属学校にあったのであり、まさに附属学校は近代日本教育の金字塔であり灯台であったのである。

しかしながら、昭和20年代以後、すなわち戦後教育の歩みのなかで、附属学校の地位は180度の転換を遂げたといつて過言ではないように思われる。それはマスメディアを中心としたわが国文化の一大発展・変化に基因する面もある。同時に附属学校の伝統のなかに叙上のようなプラス面とともに内包されたマイナス面があり、それへの批判的反省が民主主義教育の理念の大旗のもとに押し返されたことも重要要因として併せ考えるべきことをも否定できない。それにしても、社会体制の急激な変化にともなって派生した諸種の教育問題を山積のままで背負っているわが国教育界の現状にあって、加え、日々に高まる21世紀の登音を耳にし、その喚びかけに応えるべき人間形成の営みの中心機関と人とをどこに求めるべきであろうか。まさに附属学校ではなからうか。それは決して特権的な意識や思い上がった気持ちに支えられたものではなく、その本質的属性に照してナチュラルに出て来ることのように考える。原点に帰って再出発が求められているように考えられてならない。

思うに、附属学校には大要3つの機能・使命があるといえよう。1つは教育実習校としてのそれで、教師養成大学・学部附属において典型的に求められる。それは一般大学の附属学校においてもいえることである。開放制教員養成制度における教育実習の問題点に徴すれば、その度の増大が予想される。

その2は模範学校としてのそれである。これは叙上のその1ともかかわる面があるが、それ独自の立場において指摘される側面である。いうまでもなく、近代社会の特色の1つは教育の普及・発達であるが、その

中心機関としての学校の整備・拡充は実に目覚ましいものがあるが、そのためにもモデルとなるべき学校が必要であるが、附属学校こそかかるものでなければならない。もちろんそれは、施設・設備といった物的側面についての意味もあるが、同時に人的構成・管理運営組織といった面をも意味するのであって、要するに各学校集団（段階）における憧憬的存在たることが期待される。

その3は、実験学校・研究学校的機能である。既述のように、現在のわが国教育界には解決を迫られている問題が山積している。予想される問題もある。これらの諸問題に対して、政策的・行政的な立場からも、或いは理論的・原理的な立場からも、はたまた実践的立場からもそれぞれ解決への努力はなされている。しかし、他の社会的問題とは異なって教育問題は、即物的・即時的に解決の目途を立てることが困難である。長期的・広域的・総合的展望を必要とする「まのろさ」は避けられない。実験学校・研究学校の必要性はここにある。この場合、一般の公立学校をこれに当てるとも可能であり、現実にそのようなことが行なわれているが、それは本来的ではない。約250校に上る現存附属学校が中心となり、意図的・具案的に推進されるべきである。ここから得られた成果が教育界に与える影響や効果は蓋し測り知れないものがあると考え。たまたまこうした形で筆を運んでいるうちに、在任中の1つのことが想起されて来た。その1つは能力（学力）別学習のことである。確か、可成りの討議を重ねた。そして実践した。そしてその段階における結果を纏めて公けにしたことである。周知のように、現在教育界の問題として関心と呼んでいるものに「ゆとりのある教育」とか「落ちこぼれ」とかの語によって表現される問題がある。表現の適否はとも角、かかる問題が全国的研究集会において熱心に論議されたことは、比較的近時のことであり、その意義は大きい。あれやこれや思いを馳せるにつけても、10余年前のあの研究のもつ意義の重大性は喋々の要はないであろう。教育工学的研究また然りである。ともあれ、名大附属における伝統的な研究・実験校意識は評価されるべきである。

附属学校が一般的にいて、以上のような諸機能・使命をもつことについて、いま更こと新しく述べた事は、烏滸も甚だしい感がする。また1附属校が3使命を同時・並行的に十全に果すべきとの意味でもないことは付言の要がある。にもかかわらず敢てかくの如くに言及した所以のものは、一般的にいて、全国現存の附属学校においては、かかる使命観を放棄して、もっとも避けるべき受験学校ないし歪曲された英才教育に走るものが少なくないからである。それは昭和44年11

月、教育職員養成審議会が附属学校のあり方について文部大臣に建議し、文部省また幾度か通達を発している事実に鑑みてのことである。かかる趨勢のなかで名大附属学校が、かかる淵瀬に陥ることなく、本来の使命達成に努めて来たことは評価されるべきであり、30周年記念を迎えられたこの機に、いっそうの努力と成果を期待して止まないところである。

さて、以上の如くに考えながら、また3使命の何れに重点を置いて個有のレーゾンデートルを保持するにしても、その基底的重要問題としてとり挙げなければならないことは、附属学校と大学・学部との協力関係の緊密化である。すなわち、テーマの設定・研究方法・予算という研究自体の面においても、はたまた校長・教頭・研究担当者といった人事面においても、両者の有機的・一体的な構成・運営について適性化が必要なことである。もちろんこれらの問題に関して、観念的には十分に理解されているところである。要は、これに関する決意と実現のための蛮勇が必要である。すなわち、周知のように教育の研究及び実践にはその背景として理論的アプローチに基づく教育科学的要素が不可欠なことである。しかしながら、教育ほど個別的・具体的・複合的なものはない。設定された仮説による理論的考察のみでは解決し得ない分野が多々存する。「10人10色・100人・100色」という言葉そのままである。これは実践的に把握されなければならない。前者が大学教師の、後者は現場（附属）教師の領域であると一応いい得たとしても、それぞれの領域に閉じこもっては、トータルに教育に寄与することができない。何れかに主たる足場を据えながらも、それを止揚した立場が必要であり、両者の協同が不可欠の要件であり、それは即大学・学部との緊密な協力関係ないし一体化が必要である。それは人事構成にも及ぶのである。いま実態についてみると、大学・学部教員にして現場出身者・実践の体験者が極めて少ないし、現場において理論的アプローチに習熟した者も少ない。それは各々がそれぞれ優越性・劣悪性を内心に秘めていることに基づく点が多い。通俗な体験的表現をとれば「大学（教員）は理論的であり、現場教師のそれは非理論的・非大学的」との観念があるように感じられる。かかる保守的な観念は打破すべきであり、これを人事行政の面において打破する決意と蛮勇とを期待する。かかるなかで名実共に緊密化・一体化することによって、附属学校が本来の使命を果すことができるものと考え

以上、不備な筆の運びに終ったことをお詫びするとともに、30周年を迎えられた名大附属学校の一層の発展を切に期待する。

（昭和53年5月12日記）